

先史アジア語とその残影 (7)

近 藤 健 二*

はじめに

ここまでの一連の調査において私が堅持してきた研究上の格律は、世界の諸言語がもとは一つであったという確信である。そしてこの稿での新たな企ては、あのインド・ヨーロッパ祖語にまで触手をのばして、その確信の裏付けとなる言語事実を提示することである。この意味において本稿は、ユーラシア語の先史を見はらかす鳥瞰を求めようとする試みであると言つてよい。

言語が単一起源を有するという考えは、そういう学説があったかどうかはおくとして、決して突拍子もないものではない。むしろ、現生人類の単一起源が決定的となった今、言語の複数起源説を唱える方がはるかに非現実的である。

周知のように、母から娘へと伝えられるミトコンドリア DNA の紐によって結ばれた系統樹の軌跡を逆行していくと、この世に住むすべての人間はおよそ 20 万年前に生きていた一人の女性「アフリカのイヴ」にたどりつくという。また、父から息子へと受け継がれていく Y 染色体も、われわれの父親たちすべてが一人の男性「アフリカのアダム」へと溯ることを物語っているという。このように一人の女性と一人の男性の両方の血をひく人たち（正確に言えば、その一部）だけが幸運にも累々と世代を重ねることができたけれども、そうでない系統の人々は死に絶え、「血統崩壊」に陥ったというのだ。

これだけではもちろん、言語の起源が一つであることにはならない。言語の発生時期が問題である。私たちの祖先は 5 万年か 6 万年くらい前にアフリカを出て世界の各地に散らばっていったと言われるが、仮に言語の誕生が出アフリカ以降のものであるならば、言語は世界のあちこちで生まれたと見なさなければなるまい。しかし、その可能性はきわめて低い。というのも、私たちの共通祖先はすでにアフリカにいたときから、現代人に劣らぬ知力を有していたと考えられるからである。海部（2005：93）は、現生人類が誕生してから現在に至るまでの技術的・社会的発展が知力の進化によるものではなく、文化的な変化であったとする人類学者たちの考えを次のように支持する。曰く、「アフリカにいた共通祖先とは、私たち

* 人文学部教授一言語学

そのものなのだ」と。

さて問題は、世界の言語が単一起源であることを言語学の側から証かすことができるかどうかである。この難題に挑むために本稿では、以下に示す三つの言語の中から同源の語の組みあわせを発見しようと努める。

(1) インド・ヨーロッパ祖語

これは、インド、中央アジアからヨーロッパのほぼ全域に分布するインド・ヨーロッパ語族と呼ばれる一大言語群の祖語である。この言語を話す人々は紀元前3千年ないしは4千年ころに黒海とカスピ海を結ぶ地域の北方、南ロシアの草原地帯に住んでいたという有力な説がある一方で、彼らは紀元前4千年代にアナトリアの東方、カフカース、北メソポタミア一帯に居住していたというガムクレリゼとイヴァーノフ(1984)の説もある。インド・ヨーロッパ語族の故地についての議論はこれまで幾度ともなく繰り返されてきたが、いずれの説も状況証拠らしきものを提示するにとどまっている。

一方、インド・ヨーロッパ祖語そのものについては、19世紀以来の目も眩むような精緻な研究の積み重ねによって非常に多くのことが知られるようになっている。インド・ヨーロッパ祖語で記された言語資料は一切存在しないけれども、古代インドのサンスクリット（梵語）とギリシア語あるいはラテン語との比較をはじめとする膨大な研究を通じて、祖語の段階に存在したと見なされる語根が推定形として再建されているのである。以下において引きあいに出すインド・ヨーロッパ祖語は、まさにそのような語根である。

(2) 古代中国語

これは、周・秦・漢の時代のいわゆる上古漢語のことである。大雑把に言うと、日本の弥生時代の中国語であり、その発音は『詩経』（約3千年前にその一部が作られ、約2千6百年前に完成した）をはじめとする文献における韻のふみ方などの研究によって明らかにされている。

(3) 古代日本語

これは、奈良朝時代の日本語、つまり『古事記』や『万葉集』に見られる日本語である。この時代の発音は、万葉仮名の研究からその全容がほぼ明らかになっている。

これら三つの言語のうち古代中国語と古代日本語は、ここまでの論考でも考察対象に据えてきた。これら二つの言語の系統を論じることさえ、一笑に付されるような行為であった。これにはるか彼方のインド・ヨーロッパ祖語を加えた比較研究たるや、途方もない大風呂敷であり、そんなものからは果実のかけらだに収穫できぬ、と見る向きも多かろう。しかし笑い給う勿れ、私にしてみれば、今からやろうとしている同源の語の探索は従来の言語史研究の視野からすっぽりと抜け落ちていた未踏の、興味津々たる領野である。向かい合おうとする言語は何しろ手ごわい相手だが、これらをつぶさに突きあわせ、混然とした言葉の山中か

ら同一語根を有する単語群, すなわち単語家族なるものを捜しだすことに努力を集中すれば, それが新たな地平を画期的に拓く突破口にならぬとも限らない。求められているものは, 百の議論を尽くすというよりも, 言語事実の一つ一つを集積しようとする気構えである。

なお, 三つの言語にわたる単語家族を提示するにあたって依拠する基本的文献は, インド・ヨーロッパ祖語に関してはワトキンズ (1985), 古代中国語に関しては藤堂保明・加納喜光編 (2005), 古代日本語に関しては大野晋ほか編 (1990) である。

1. *tag- 「ふれる」・*dek- 「とる」・*sek- 「きる」などとの対応

最初に取りあげる同源の語は, インド・ヨーロッパ祖語の語頭の $t \cdot d \cdot s$ が古代中国語の語頭の $t \cdot t^h \cdot th \cdot ts \cdot ts^h \cdot d \cdot dh \cdot d \cdot dz \cdot d \cdot s$ という一連の音と対応するとともに, インド・ヨーロッパ祖語の $k \cdot k^w \cdot g \cdot g^w \cdot g^wh \cdot gh \cdot nk \cdot ng \cdot ng^wh \cdot \eta \cdot n$ が古代中国語の語末の $g \cdot \eta \cdot n$ と対応している。

対応する古代日本語の形態には注意を要する。本来は k や g の音であったものが古代日本語では $k \cdot g \cdot n$ だけではなく, $\phi \cdot y \cdot w$ や $b \cdot m$ の音にも変化した。あるいは, それが消失してしまっている場合もある。このような音の変化に対する認識を欠くと, 古代日本語が対応するインド・ヨーロッパ祖語あるいは古代中国語としばしば似もつかない形をしていることの理由がおそらくさっぱり理解できないであろう。

- ㊦ *tak- 「しずかである・しんとしている」 (be silent)
- ㊧ 静 (dzien) 「しずか・しずめる」《 $t \sim dz$, $k \sim \eta$ の対応》
- ㊨ 静か (siduka) 《重複形の *sikuduku に由来。 $t \sim s \cdot d$, $k \sim \text{ゼロ} \cdot k$ の対応》

- ㊦ *tek- 「(子を) もうける (beget)・うむ (give birth to)」
- ㊧ 生 (sien) 「いきる・いかす・うむ・うまれる」《 $t \sim s$, $k \sim \eta$ の対応》
- ㊨ 産 (sǎn) 「うむ・うまれる」《 $t \sim s$, $k \sim n$ の対応》

- ㊦ *tek^w- 「はしる (run)・にげる (flee)」
- ㊧ 走 (tsug) 「はしる」《 $t \sim ts$, $k^w \sim g$ の対応》
- ㊨ 逃 (dog) 「にげる」《 $t \sim d$, $k^w \sim g$ の対応》

◆ これらは古代中国語の tsiuk (足) と同源である。

- ㊦ *teks- 「おる・あむ (weave)・(斧で) つくる・くみたてる (fabricate with an ax) ; (土でおわれた) 塀のために枝あみ細工をする (make wicker [wattle fabric] for (mud-covered) house walls)」
- ㊧ 織 (tiək) 「おる」《 $t \sim t$, $k \sim k$ の対応》
- ㊨ 匠 (dzian) 「たくむ」《 $t \sim dz$, $k \sim \eta$ の対応》
- ㊩ 匠む (takumu) 《 $t \sim t$, $k \sim k$ の対応。 -mu は動詞語尾》

◆ これらは古代中国語の thiog (手) と同源である。この語と縁続きの単語家族は多い。

㊦ *tag- 「ふれる (touch)・つかむ・とりあつかう (handle)」

㊧ 触 (t^hiuk) 「さわる・ふれる」《t~t^h, g~k の対応》

㊨ 触る (saɸaru) 《t~s, g~ɸ の対応。-ru は動詞語尾》

◆ 古代日本語のサ・ス・ソは破擦音の tsa・tsu・tso であったという有力な説がある。これに従えば、saɸaru (触る) は tsaɸaru と表記しなければならない。なお、古代日本語の ɸ 音はかつては p 音であったという考えが定説になっているが、ɸ 音はむしろ k・g 音に由来するものの方が多い。この点を見誤ると、多数にのぼる語の正しい語源がつかめなくなる。

㊦ *tāg- 「ととのえる (set in order)」

㊧ 調 (dög) 「ととのえる」《t~d, g~g の対応》

整 (tieg) 「ととのえる・ととのう」《t~t, g~ŋ の対応》

㊨ 整ふ (tötönöɸu) 《重複形の *tökötökönöɸu に由来。t~t, g~ゼロの対応。-nöɸu は「商ふ (akinaɸu)」の -naɸu と同種の動詞語尾》

㊦ *tenk- 「ひきのばす・ひっぱる (stretch)」

*ten- 「ひきのばす・ひっぱる (stretch)」

㊧ 展 (tān) 「おしのばす・のばす・ひらく・ひろげる」《t~t, nk・n~n の対応》

坦 (t^han) 「たいら・たいらにのびる」《t~t^h, nk・n~n の対応》

㊨ たな引く (tanaiku) 《t~t, nk・n~n の対応。「横になびく」の意》

㊦ *tenk- 「かたくなる (become firm)・凝固する〔させる〕(curdle)・厚くなる (thicken)」

㊧ 締 (deg) 「しめる・むすぶ」《t~d, nk~g の対応》

㊨ つくむ (tukumu) 《t~t, nk~k の対応。-mu は動詞語尾。「きつくしめる」の意》

噤ふ・閉ふ (tukuɸu) 《t~t, nk~k の対応。-ɸu は動詞語尾。「きつくとじる・つぐむ」の意》

締む (simu) 《t~s, nk~m の対応》

結ぶ (musubu) 《重複形の *sumusubu に由来。t~ゼロ・s, nk~m・b の対応》

㊦ *teng- 「ひたす・ぬらす・ひたる・つかる (soak)」

㊧ 淀 (dzük) 「ぬれる・ぬらす」《t~dz, ng~k の対応》

漬 (dzieg) 「ひたす・つける」《t~dz, ng~g の対応》

㊨ 漬く (tuku) 《t~t, ng~k の対応》

◆ 朝鮮語の ɟʒəkʃi- 「ぬらす」、アイヌ語の cik 「(滴が) したたる」、ウイльта語の tug- 「雨がふる」や čikpa 「ぬれた」などもこれらと同源である。

㊦ *tong 「おもう・かんがえる (think)・感じる (feel)」

㊧ 思 (siæg) 「おもう」《t~s, g~g の対応》

想 (sian) 「おもう」《t~s, g~ŋ の対応》

㊦ *dek- 「とる・もつ・つかむ (take)・うけとる (accept)」

㊧ 取 (ts^hiüg) 「とる」《d~ts^h, k~g の対応》

受 (dhiog) 「うけとる」《d~dh, k~g の対応》

授 (dhiog) 「さずける」《d~dh, k~g の対応》

- ㊦ 取る (toru) 《d~t, k~ゼロの対応。-ru は動詞語尾》
 受く (uku) 《d~ゼロ, k~k の対応》
 授く (saduku) 《重複形の *sakuduku に由来。d~s・d, k~ゼロ・k の対応》
- ㊦ *deik- 「しめす (show)・のたまう (pronounce solemnly)」
- ㊦ 詔 (tiog) 「みことのり・つげる・めす」 《d~t, k~g の対応》
- ㊦ 告ぐ (tugu) 《d~t, k~g の対応》
- ㊦ *deuk- 「みちびく (lead)」
- ㊦ 導 (dog) 「みちびく」 《d~d, k~g の対応》
 迪 (dök) 「みち・みちびく・すすむ・ふむ」 《d~d, k~k の対応》
- ㊦ *deigh- 「むし・昆虫 (insect)」
- ㊦ 虫 (dion) 「むし」 《d~d, gh~ŋ の対応》
- ㊦ *dheg^wh- 「もえる・やく (burn)・あたたまる・あたためる (warm)」
 *senk- 「もえる・やく (burn)」
 *skeəi- 「きらめく (gleam)」
- ㊦ 灼 (tiak) 「やく・もやす」 《dh・s~t, g^wh・nk・k~k の対応》
 炙 (tiak) 「あぶる・やく」 《dh・s~t, g^wh・nk・k~k の対応》
 焼 (thiog) 「やく・やける」 《dh・s~th, g^wh・nk・k~g の対応》
 曜 (diog) 「かがやく・かがやかす」 《dh・s~d, g^wh・nk・k~g の対応》
 陽 (dian) 「ひ・太陽」 《dh・s~d, g^wh・nk・k~ŋ の対応》
- ㊦ 灼く (taku) 《dh・s~t, g^wh・nk・k~k の対応》
 月 (tuku・tuki) 《dh・s~t, g^wh・nk・k~k の対応》
- ㊦ *dheigh- 「粘土をこねる (kneal clay)；形づくる (form), たてる (build)」
 *dheugh- 「役立つものをつくりだす」 (produce something of utility)」
- ㊦ 作 (tsak・tsag) 「つくる・なす」 《dh~ts, gh~k・g の対応》
 造 (dzog) 「つくる・なす」 《dh~dz, gh~g の対応》
- ㊦ 作る・造る (tukuru) 《dh~t, gh~k の対応。-ru は動詞語尾》
- ㊦ *dhig^w- 「つく・さす (stick)・とりつける・すえる (fix)」
- ㊦ 撞 (düg) 「つく・つきとおす」 《dh~d, g^w~g の対応》
 即 (tsiak) 「つく・くつつく」 《dh~ts, g^w~k の対応》
- ㊦ 撞く (tuku) 《dh~t, g^w~k の対応》
 付く (tuku) 《dh~t, g^w~k の対応》
- ㊦ *dhghem- 「大地・つち (earth)」
- ㊦ 土 (t^hag) 「つち・大地」 《dh~t^h, gh~g の対応》
 地 (dieg) 「つち・大地」 《dh~d, gh~g の対応》
- ㊦ 土 (tuti) 《重複形*tukutiku に由来。dh~t, gh~ゼロの対応》
 地 (di) 《dh~d, gh~ゼロの対応》

- イ *dhgh(y)es 「きのう (yesterday)」
- Ⓜ 昨 (dzak) 「きのう・むかし」《dh~dz, gh~k の対応》
昔 (siäk) 「むかし」《dh~s, gh~k の対応》
- ㊦ 古 (inisiŋe) 《dh~s, gh~ $\emptyset$ の対応。ini- は inu (往ぬ・去ぬ) の連用形》
- イ *sak- 「神聖にする (sanctify)」
- Ⓜ 清 (ts^hien) 「きよい・きよらか・きよめる」《s~ts^h, k~ η の対応》
浄 (dzien) 「きよい・きよらか・きよめる」《s~dz, k~ η の対応》
- ㊦ 禊 (misogu) 《s~s, k~g の対応。mi- は「身」で、「身を清める」の意。mi (身) と susugu (濯ぐ) との複合とする説がある》
- イ *sāg- 「さがしだす (seek out)」
- Ⓜ 搜 (sīog) 「さがす」《s~s, g~g の対応》
- ㊦ 搜す (sagasu) 《s~s, g~g の対応。-su は動詞語尾》
- イ *sek- 「きる (cut)」
- *skei- 「きる (cut)・さく・わる (split)」
- Ⓜ 宰 (tsəg) 「きる・さく」《s~ts, k~g の対応》
斬 (sieg) 「きる・さく」《s~s, k~g の対応》
- ㊦ 割く・裂く (saku) 《s~s, k~k の対応》
放く・離く (saku) 《s~s, k~k の対応。「放つ・遠くへやる」の意》
切る (kiri) 《s~ゼロ, k~k の対応。-ru は動詞語尾》
- イ *sek^w- 「つぐ・つづく・したがう (follow)」
- Ⓜ 続 (ḍiuk) 「つづく・つづける」《s~ḍ, k^w~k の対応》
属 (tiuk) 「つく・つける・つづく・つづける」《s~t, k^w~k の対応》
- ㊦ 続く (tuduku) 《重複形の *tukuduku に由来。s~t・d, k^w~k の対応》
- イ *sek^w-・*skeu 「知覚する (perceive)・みる (see)・きく (hear)」
- Ⓜ 知 (tieg) 「しる」《s~t, k^w・k~g の対応》
督 (tok) 「みる」《s~t, k^w・k~k の対応》
聴 (t^hen) 「きく」《s~t^h, k^w・k~ η の対応》
- ㊦ 知る (siru) 《s~s, k^w・k~ゼロの対応。-ru は動詞語尾》
- イ *segh- 「つかむ・にぎる (hold)」
- Ⓜ 抓 (tsəg) 「つまむ・つかむ」《s~ts, gh~g の対応》
- ㊦ 握む (tukamu) 《s~t, gh~k の対応。-mu は動詞語尾》
- イ *seng^wh- 「うたう (sing)・呪文をとなえる (make an incantation)」
- Ⓜ 唱 (t^hiaŋ) 「となえる・うたう」《s~t^h, ng^wh~ η の対応》
謠 (ḍiog) 「うたう・うた」《s~ḍ, ng^wh~g の対応》
呪 (tiog) 「のろう・のろい・まじない」《s~t, ng^wh~g の対応》
- ㊦ 唱ふ (tonaḥu) 《s~t, ng^wh~n の対応。-ḥu は動詞語尾》

- ㊦ *skand-・*skend- 「とぶ・はねる (leap)・のぼる (climb)」
- ㊧ 跳 (dög) 「はねる・おどる・とぶ」《s~d, k~g の対応》
登 (təŋ) 「のぼる」《s~t, k~ŋ の対応》
- ㊨ 跳ぶ・飛ぶ (töbu) 《s~t, k~b の対応》

- ㊦ *skeud- 「(矢を) いる (shoot)・おう (chase)・なげる (throw)」
- ㊧ 射 (diäg) 「いる・あてる」《s~d, k~g の対応》
投 (dug) 「なげる」《s~d, k~g の対応》
- ㊨ 射る (iru) 《s~ゼロ, k~ゼロの対応。-ru は動詞語尾》

- ㊦ *skut- 「ゆさぶる・ゆれる (shake)」
- ㊧ 揺 (diög) 「ゆれる・ゆする」《s~d, k~g の対応》
- ㊨ 猶預ふ (tayutaŋu) 《重複形で, s~t, k~y・ŋ の対応。「ゆらゆらと動く」の意》
揺る (yuru) 《s~ゼロ, k~y の対応。-ru は動詞語尾》

2. *del- 「したたる」・*dhel 「うつるな」・*ser 「ながれる」などとの対応

さて次に取りあげるのは、インド・ヨーロッパ祖語の語頭音 t・d・dh・dhw・s が古代中国語の語頭音 t・t^h・ts・ts^h・d・dh・d・s と対応するとともに、インド・ヨーロッパ祖語の l・r 音が古代中国語の語末の r 音と対応している語である。このような語の組みあわせはその数こそ少ないが、同源の語であることは明瞭である。

- ㊦ *del- 「したたる・したたらせる (drip)」
*dhreu- 「おちる・おとす (fall)・ながれる・ながす (flow)・したたる・したたらせる (drip)・たれる・たれさせる (droop)」
*(s)leu- 「たるむ (hang loosely)；ゆるんだ (loose)・しまりのない (loose)」
*(s)leb- 「だらんとした・ゆるんだ (hanging loosely)」
- ㊧ 垂 (dhiuar) 「たれる・たらす」《d・dh・s・ゼロ~dh, l・r~r の対応》
墮 (duar) 「おちる・おとす」《d・dh・s・ゼロ~d, l・r~r の対応》
- ㊨ 垂る (taru) 《d・dh・s・ゼロ~t, l・r~r の対応》

- ㊦ *drem- 「ねむる (sleep)」
*(s)lēb- 「よわい (be weak)・ねむる (sleep)」
- ㊧ 睡 (dhiuar) 「ねむる・ねむり」《d・s・ゼロ~dh, r・l~r の対応》
- ㊨ 微睡む (madoromu) 《d・s・ゼロ~d, r・l~r の対応。-mu は動詞語尾。ma- は、古代中国語の miuər (微)「かすか・わずかに」と同源か》
- ◆ これらの語は目・体が「とろん」とした状態になることを表すが、甲 (2011) によると、沖永良部島の「アサドゥリ」と「ユードゥリ」という言葉は風が「とろん」となること、すなわち「朝風」と「夕風」を意味する。また、「トゥリユン」は「波風が静かになる・人の騒ぎ

や泣き声などが静かになる」を意味し、「トゥリドゥリトゥ」は「穏やかで静かなさま」を意味するという。

- ㊦ *dhel- 「うつろな・空洞の (hollow)」
*treb- 「すみか・住居 (dwelling)」
- ㊧ 鱣 (tiar) 「さかずき」《dh・t~t, 1・r~r の対応》
碓 (tuər) 「うす」《dh・t~t, 1・r~r の対応》
- ㊨ 罇・樽 (tari・taru) 《dh・t~t, 1・r~r の対応》
寺 (tera) 《d・t~t, 1・r~r の対応》
鱈 (tara) 《d・t~t, 1・r~ の対応》
- ◆ *treb- は、かつて洞穴が人のすみかであったことをうかがわせる。同様に, tera (寺) は内部が「がらんどろ」であること, tara (鱈) は腹の中にものが「たらふく」入ることに着目した命名である。また甲 (2011) によると, 沖永良部島に「岸壁を穿った横穴で共同風葬墓となった所」を表す「トゥール」と呼ばれる語があるが, これもここに示した語と同源である。なお, 英語の dale 「谷」はここに示した *dhel- に由来するが, この語は日本語の otari (小谷) などの地名における -tari と比較されるべきである。
- ㊦ *dher- 「とろかす・どろどろにする (make muddy) ; くらやみ (darkness)」
- ㊧ 唾 (t^huar) 「つば・つばをはく」《dh~t^h, r~r の対応》
脂 (tier) 「あぶら」《dh~t, r~r の対応》
尿 (thier) 「くそ」《dh~th, r~r の対応》
水 (thiuər) 「みず」《dh~th, r~r の対応》
- ㊨ 蕩く (toroku) 《dh~t, r~r の対応。-ku は動詞語尾》
泥 (doro) 《dh~d, r~r の対応》
汁 (siru) 《dh~s, r~r の対応》
- ◆ 朝鮮語の sur・suur 「酒」はこれらの語と同源と見てよい。
- ㊦ *dher- 「のらくらすぐす (drone)・ブツブツいう (murmur)・ブンブンいう (buzz)」
- ㊧ 惰 (duar) 「おこたる・なまける」《dh~d, r~r の対応》
- ㊨ 疲る・倦る (daru) 《dh~d, r~r の対応。「つかれる」の意》
怠し・懈し (tarusi) 《dh~t, r~r の対応。-si は形容詞語尾》
怠る (okotaru) 《dh~t, r~r の対応。oko- は, 古代中国語の keg duar (懈惰)「おこたる」の keg (懈)「おこたる」と同源。ökōnaφu (行ふ) の ökō- とは無関係である》
- ㊦ *dhragh- 「ひく・ひっぱる (drag)・ひきずる (drag on the ground)」
*dhreg- 「ひく・ひっぱる (drag)・すべる (glide)」
*tragh- 「ひく・ひっぱる (drag)・ひきずる (drag)・うごかす (move)」
- ㊧ 拵 (t^har) 「ひく・ひっぱる・ずるずるとひく」《dh・t~t^h, r~r の対応》
移 (ḡiar) 「うつる・うつす・よこにずれる」《dh・t~ḡ, r~r の対応》
- ㊦ *dhregh- 「はしる (run)」
- ㊧ 馳 (diar) 「はせる・はしる」《dh~d, r~r の対応》

- ㊦ *dhwer- 「戸 (door)・戸口・出入口 (doorway)」
- ㊧ 隧 (ḍiuǎr) 「みち・通路・トンネル」《dhw~ḍ, r~r の対応》
- ㊦ *ser- 「ながれる・ながす (flow)」
- *sreu- 「ながれる・ながす (flow)」
- ㊧ 洗 (ser) 「あらう」《s~s, r~r の対応》
- 晒 (sēr) 「さらす」《s~s, r~r の対応》
- ㊧ 曝す・晒す (sarasu) 《s~s, r~r の対応。-su は動詞語尾》
- 白 (siro・sira) 《s~s, r~r の対応。「汚れが洗い流されたさま」が原義》
- 空 (sora) 《s~s, r~r の対応。「空白・からっぽ」が原義》
- 洗ふ (araḥu) 《s~ゼロ, r~r の対応。-ḥu は動詞語尾》
- 潤ふ (uruḥu) 《s~ゼロ, r~r の対応。-ḥu は動詞語尾》
- 新た (arata) 《s~ゼロ, r~r の対応。-ta は、古代中国語の t^häg (熊) と同源か》
- ◆ 元来は水が「さらさら」流れるイメージに根づいた語であると考えられる。siro・sira (白) や sora (空) は二次的な派生語であろう。甲 (2011) によると、沖永良部島と喜界島に「うるおい・降雨」を意味する「ウレ」という語があるが、これも語頭の s 音を消失させた同源の語である。なお、インド・ヨーロッパ祖語には「海」を表す語はなかったのではないかとされているが、英語の sea 「海」は、古ノルド語にそれと同源の sær・sjár・sjór 「海」という形が見受けられるので、やはりここに示した語と同源であると推定される。
- ㊦ *ser- 「一列にならぶ (line up)」
- ㊧ 肆 (sier) 「つらねる・ならべる」《s~s, r~r の対応》
- 維 (ḍiuǎr) 「つな・つなぐ」《s~ḍ, r~r の対応》
- 次 (ts^hier) 「つぎ・つぐ」《s~ts^h, r~r の対応》
- ㊧ 連る (turu) 《s~t, r~r の対応》
- 連らぬ (turanu) 《s~t, r~r の対応。-nu は動詞語尾》
- 蔓・弦 (turu) 《s~t, r~r の対応》
- ㊦ *serp- 「はう (crawl)・はらばう (creep)」
- *sleidh- 「つるつるした (slippery)；すべる (slip)・すべりうごく (slide)」
- ㊧ 蛇 (t^har・diar) 「へび」《s~t^h・d, r・l~r の対応》
- ㊧ 蛇 (uruḥasi) 《s~ゼロ, r・l~r の対応。-ḥasi は「足」の意か》
- ◆ 英語の serpent 「へび」は、ここに示した *serp- に由来する。ところで、奈良県に「蛇穴 (saraki)」という地名があるが、これはかつてへびのことを sara あるいは suru と呼んでいた名残りなのか。山中 (1979) は「蛇穴と書いてサラキと読むわけを、ご承知の方は教えていただきたい」と述べている。
- ㊦ *sloug- 「たすけ・援助 (help)・奉仕・世話 (service)」
- ㊧ 佐 (tsar) 「たすける・たすけ」《s~ts, l~r の対応》
- ◆ 日本語の tasuku (助く) は、古代中国語の tsar (佐) と džiag (助) に対応する形か。

3. *kes- 「きる」・*ghed- 「あな」・*g^wet- 「いう」 などとの対応

ここで扱うのは、インド・ヨーロッパ祖語の語頭音 $k \cdot kw \cdot gh \cdot g^w$ が古代中国語の語頭音 $k \cdot k^h \cdot \eta \cdot fi$ と対応するとともに、インド・ヨーロッパ祖語の $t \cdot d \cdot dh \cdot s$ が古代中国語の語末の $t \cdot d$ と対応している語である。この種の語も、その数は非常に少ない。

㊦ *ked- 「いく (go)・屈服する・まける (yeild)」

㊧ 竭 ($k^h iat$) 「さる・いく」《 $k \sim k^h$, $d \sim t$ の対応》

㊨ 徒・徒歩 ($kati \cdot kasi$) 《 $k \sim k$, $d \sim t \cdot s$ の対応》

㊦ *kes 「きる (cut)」

㊧ 割 (kat) 「わる・さく」《 $k \sim k$, $s \sim t$ の対応》

刮 ($kuāt$) 「けずる・えぐる」《 $k \sim k$, $s \sim t$ の対応》

抉 ($kuāt$) 「えぐる」《 $k \sim k$, $s \sim t$ の対応》

刈 ($\eta iād$) 「かる」《 $k \sim \eta$, $s \sim d$ の対応》

絜 ($fiāt$) 「きざむ・きりとる」《 $k \sim fi$, $s \sim t$ の対応》

㊨ 搗つ ($katu$) 《 $k \sim k$, $s \sim t$ の対応》

削る ($keduru$) 《 $k \sim k$, $s \sim d$ の対応。-ru は動詞語尾》

快る ($kuziru$) 《 $k \sim k$, $s \sim z$ の対応。-ru は動詞語尾》

刮 ($kisagu$) 《 $k \sim k$, $s \sim s$ の対応。-gu は動詞語尾》

刻む ($kizamu$) 《 $k \sim k$, $s \sim z$ の対応。-mu は動詞語尾》

㊦ *kwes- 「あえぐ (pant)・ゼイゼイいう (wheeze)」

㊧ 気 ($k^h iəd$) 「いき」《 $kw \sim k^h$, $s \sim d$ の対応》

吃 ($k iət$) 「どもる・吃音」《 $kw \sim k$, $s \sim t$ の対応》

㊨ 風 ($kaze$) 《 $kw \sim k$, $s \sim z$ の対応》

風邪 ($kaze$) 《 $kw \sim k$, $s \sim z$ の対応。咳に着目した命名》

東風 ($koti$) 《 $k \sim k$, $s \sim t$ の対応》

◆ $koti$ (東風) という語は、「東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」という歌に引きづられてか、何となく若葉の香りを運ぶ薫風に似たものを思わせぬでもないが、本来は「ヒュー」と東から吹く春風のことである。なお甲 (2011) によると、沖永良部島では「ハジ (口笛)」を吹くとハジ (風) が吹く」と言うそうである。これらの「ハジ」はいずれも語頭の k 音が h 音に弱化した形であり、ここに示した語と同源である。奄美方言では、このような k 音の h 音化がごく普通に起こっている。

㊦ *ghed- 「あな (hole)」

* $kādh$ - 「保護する・かくす (shelter)・おおう (cover)」

* $kistā$ 「かご (basket)」

㊧ 窟 ($k^h uət$) 「ほらあな・あな・いわや」《 $gh \cdot k \sim k^h$, $d \cdot dh \cdot s \sim t$ の対応》

穴 ($fiuət$) 「あな」《 $gh \cdot k \sim fi$, $d \cdot dh \cdot s \sim t$ の対応》

闕 (k^huăŋt) 「宮殿の門・かく・かける」《gh・k~k^h, d・dh~t の対応》

器 (k^hied) 「うつわ」《gh・k~k^h, d・dh~d の対応》

㊦ 口 (kutu・kuti) 《gh・k~k, d・dh・s~t の対応》

靴 (kutu) 《gh・k~k, d・dh・s~t の対応》

門 (kado・katu) 《gh・k~k, d・dh・s~d・t の対応》

管 (kuda) 《gh・k~k, d・dh・s~d の対応》

全・空・虚 (utu) 《gh・k~ゼロ, d・dh~t の対応》

内 (utu・uti) 《gh・k~ゼロ, d・dh~t の対応》

器 (utuφa) 《gh・k~ゼロ, d・dh~t の対応。-φa は「輪」の意》

碓・臼 (usu) 《gh・k~ゼロ, d・dh~s の対応》

◆ この単語家族は「空洞・からっぽ」あるいは「内包」という意味を蔵している。インド・ヨーロッパ祖語の *g^wet- 「腸 (intestine)」もこれらと同源で、その原義は日本語の kuda (管) に相当するものであったかもしれない。

㊦ *ghed- 「つかむ・にぎる・とらえる (seize)・とる・もつ (take)」

㊦ 擷 (fiēt) 「つむ・つかむ」《gh~fi, d~t の対応》

㊦ *ghedh- 「むすぶ (unite)・つぎあわせる (join)・あう・あわせる (fit)」

㊦ 結 (ket) 「むすぶ・ゆう・むすび」《gh~k, dh~t の対応》

拮 (kiet・ket) 「しめる・ひきしめる」《gh~k, dh~t の対応》

㊦ 結ぬ (katanu) 《gh~k, dh~t の対応。-nu は動詞語尾》

固む (katamu) 《gh~k, dh~t の対応。-mu は動詞語尾》

鎖る (kusaru) 《gh~k, dh~s の対応。-ru は動詞語尾。「つながりあう」の意》

㊦ *g^wet- 「いう (say)・はなす (speak)」

㊦ 日 (fiuăŋt) 「いう・いわく」《g^w~fi, t~t の対応》

謂 (fiuəd) 「いう」《g^w~fi, t~d の対応》

話 (fiuăd) 「はなす・はなし」《g^w~fi, t~d の対応》

㊦ 語る (kataru) 《g^w~k, t~t の対応。-ru は動詞語尾》

言 (kötö) 《g^w~k, t~t の対応》

㊦ *g^wes- 「けす・きえる (extinguish)」

㊦ 潰 (fiuəd) 「つゐえる・つゐやす」《g^w~fi, s~d の対応》

㊦ 消つ (ketu) 《g^w~k, s~t の対応》

消す (kesu) 《g^w~k, s~s の対応》

4. *keg- 「かぎ」・*ghen- 「かじる」・*neig^w- 「あらう」などとの対応

ここでは、インド・ヨーロッパ祖語の語頭音 k・kw・g・g^w・g^wh・gh・n が古代中国語の語頭音 k・k^h・g・g^h・ŋ・n・fi と対応するとともに、インド・ヨーロッパ祖語の k・g・gh・nk・nkh・n が古代中国語の語末音 k・g・ŋ・n と対応している語を取りあげる。

- ㊦ *kagh- 「とらえる (catch)・つかむ (seize)；枝編み細工 (wickerwork)・かこい・柵 (fence)」
- ㊧ 掴 (kuǒk) 「つかむ」《k~k, gh~k の対応》
 掴 (kiuk) 《かこむ・かかえこむ》《k~k, gh~k の対応》
 獲 (fiuák) 「える・とらえる・つかまえる」《k~fi, gh~k の対応》
 筐 (k^huaŋ) 「かご」《k~k^h, gh~ŋ の対応》
 垣 (fiuǎn) 「かき」《k~fi, gh~n の対応》
- ㊨ 拘ふ・抱ふ (kakaɸu) 《k~k, gh~k の対応。-ɸu は動詞語尾》
 囲む (kakomu)・囲ふ (kakoɸu) 《k~k, gh~k の対応。-mu・ɸu は動詞語尾》
 隠す (kakusu) 《k~k, gh~k の対応。-su は動詞語尾》
 籠・籃 (kago) 《k~k, gh~g の対応》
 垣 (kaki) 《k~k, gh~k の対応》
- ㊩ *keg- 「かぎ・フック (hook)」
 *konk- 「かける・かかる (hang)」
- ㊪ 勾 (kug) 「かぎ・まがる」《k~k, g・nk~g の対応》
 掛 (kuég) 「かける・かかる」《k~k, g・nk~g の対応》
- ㊫ 懸く・掛く (kaku) 《k~k, g・nk~k の対応》
 鍵 (kagi) 《k~k, g・nk~g の対応》
- ㊬ *keuk- 「しろい (be white)・あかるい (be bright)・ひかる・かがやく (shine)」
- ㊭ 光 (kuaŋ) 「ひかる・ひかり」《k~k, k~ŋ の対応》
 皎 (kög) 「しろい・きよい」《k~k, k~g の対応》
 皓 (fiŋŋ) 「しろい」《k~fi, k~ŋ の対応》
- ㊮ 輝く (kagayaku) 《重複形で, k~k・y, k~g・k の対応》
 清し (kiyosi) 《k~k, k~y の対応。-si は形容詞語尾。「汚れ・曇り・濁りなどがなく, 清浄・無垢であるさま」の意》
- ㊯ *kigh- 「はやい (fast)・はげしい (violent)」
- ㊰ 激 (kek) 「はげしい」《k~k, gh~k の対応》
- ㊱ 烈し・激し (ɸagesi) 《k~ɸ, gh~g の対応。-si は形容詞語尾》
 励む (ɸagemu) 《k~ɸ, gh~g の対応。-mu は動詞語尾》
- ㊲ *kenk- 「うえる・かわく (suffer from hunger or thirst)」
- ㊳ 饑 (giǎn) 「食物がとぼしい」《k~g, nk~n の対応》
 乾 (kan) 「かわく・ほす」《k~k, nk~n の対応》
- ㊴ 乾く・渴く (kawaku) 《k~k, nk~w の対応。-ku は動詞語尾》
- ㊵ *kenk- 「かかと (heel)・あしの関節 (leg joint)」
- ㊶ 跟 (kən) 「くびす・かかと」《k~k, nk~n の対応》
 脚 (kiak) 「あし」《k~k, nk~k の対応》
 曲 (k^hiük) 「まがる・まげる」《k~k^h, nk~k の対応》
- ㊷ 屈む (kagamu・kugumu) 《k~k, nk~g の対応。-mu は動詞語尾》

- ㊦ *konkho- 「イガイ・ムラサキイガイ (mussel)・貝・甲殻類の動物 (shellfish)」
- ㊧ 殻 (k^hük) 「から」《k~k^h, nkh~k の対応》
 鰕 (fiǎg) 「エビ」《k~fi, nkh~g の対応》
- ㊨ 牡蠣 (kaki) 《k~k, nkh~k の対応》
 貝・殻 (kaφi) 《k~k, nkh~φ の対応》
 卵 (kaφi) 《k~k, nkh~φ の対応。「たまご」の意》
- ◆ 琉球方言の古語に「たまご」を意味する「コガ」(口語では「コーガ」という語が存在するが、これはここにあげた語と同源である。また、アイヌ語の nok 「たまご」という語もこれらと同源であろう。

- ㊦ *kan- 「うたう (sing)」
- ㊧ 詠 (fiuǎŋ) 「うたう・うた」《k~fi, n~ŋ の対応》
- ㊨ 読む・詠む (yömu) 《k~y, n~m の対応》

- ㊦ *ken- 「活発である (be active)」
- ㊧ 健 (giǎn) 「すこやか・たけし」《k~g, n~n の対応》

- ㊦ *ken- 「からっぽの・うつろな (empty)」
- ㊧ 空 (k^huŋ) 「むなしい・からっぽ・そら」《k~k^h, n~ŋ の対応》
 隙 (k^hiǎk) 「すき・ひま」《k~k^h, n~k の対応》
 谷 (kuk) 「たに」《k~k, n~k の対応》
 暇 (fiǎg) 「ひま・いとま」《k~fi, n~g の対応》
 閑 (fiǎn) 「ひま」《k~fi, n~n の対応》
- ㊨ 岫・洞 (kuki) 《k~k, n~k の対応。「山の洞穴・谷間の隘路」の意》
 漏く (kuku) 《k~k, n~k の対応。「隙間をくぐる」の意》
 潜る (kukuru) 《k~k, n~k の対応。-ru は動詞語尾》
 隙・暇 (φima) 《k~φ, n~m の対応》
- ◆ この単語家族の原義は「空洞・からっぽ」である。インド・ヨーロッパ祖語の *ku- 「空洞の場所 (hollow space or place)・とりかこむもの (enclosing object)・まるいもの (round object)・かたまり (lump)」も同源と見てよい。

- ㊦ *kens- 「宣言する・布告する (proclaim)・のたまう (speak solemnly)」
- ㊧ 諤 (ŋak) 「いう・ごつごつと直言する」《k~ŋ, n~k の対応》
 言 (ŋiǎn) 「いう・ことば」《k~ŋ, n~n の対応》

- ㊦ *kneig^{wh}- 「もたれる・よりかかる (lean on)」
- ㊧ 頃 (k^hiueŋ) 「かたむく・かたむける」《k~k^h, n~ŋ の対応》

- ㊦ *kwon- 「イヌ (dog)」
- ㊧ 犬 (k^huǎn) 「イヌ」《k~k^h, n~n の対応》
- ㊨ 犬 (inu) 《k~ゼロ, n~n の対応》

- ㊦ *geg(h)- 「大枝 (bough)・灌木・低木・やぶ (bush)」
- ㊧ 枝 (kieg) 「えだ」《g~k, g(h)~g の対応》

- イ *gen 「まるくする・まるめる (compress into a ball)」
- 中 巻 (kuan) 「まく」《g~k, n~n の対応》
拳 (guan) 「こぶし」《g~g, n~n の対応》
- イ *gen(ə)- 「(子)を もうける (beget)・うむ (give birth to)」
- 中 養 (gīaŋ) 「やしなう・うむ」《g~g, n~ŋ の対応》
- イ *genu- 「ひざ (knee) ; かど (angle)」
- 中 肱 (kuəŋ) 「ひじ」《g~k, n~ŋ の対応》
角 (küŋ) 「つの・すみ・かど」《g~k, n~k の対応》
- イ *genu- 「あごぼね (jawbone)・あごさき・おとがいがい (chin)」
- 中 顎 (ŋak) 「あご」《g~ŋ, n~k の対応》
- 固 顎 (agi・ago) 《g~ゼロ, n~g の対応》
頤 (otogaŋi) 《g~g, n~ŋ の対応。oto は古代中国語の kuət (骨) と同源か》
- イ *g^when- 「うつ・なぐる (strike)・けがをさせる (hurt)」
- 中 叩 (k^hug) 「たたく」《g^wh~k^h, n~g の対応》
敲 (k^hög) 「たたく」《g^wh~k^h, n~g の対応》
- 固 釘 (kugī か kugi) 《g^wh~k, n~g の対応》
杭 (kuŋi) 《g^wh~k, n~ŋ の対応》
- ◆ この単語家族は、先史日本語に「うつ・たたく」を意味する *kugu という語があったことをうかがわせる。
- イ *ghen- 「かじる・かみきる (gnaw)」
- 中 齧 (ŋāg) 「かむ」《gh~ŋ, n~g の対応》
- 固 噛む (kamu) 《gh~k, n~m の対応》
- ◆ 日本語の φamu (噬む・食む) は、kamu (噛む) の子音交替形である可能性が高い。
- イ *neig^w- 「あらう・そそぐ (wash)」
- 中 濡 (niug) 「ぬれる・ぬらす・うるおう・うるおす・うるおい」《n~n, g^w~g の対応》
潤 (niuen) 「うるおう・うるおす・うるおい」《n~n, g^w~n の対応》
乳 (niüg) 「ちち」《n~n, g^w~g の対応》
- 固 渚 (nagisa) 《n~n, g^w~g の対応。-sa は「場所」の意》
ぬかる (nukaru) 《n~n, g^w~k の対応。-ru は動詞語尾》
流る (nagaru) 《n~n, g^w~g の対応。-ru は動詞語尾》
嘗む・舐む (namu) 《n~n, g^w~m の対応》
濡る (nuru) 《n~n, g^w~ゼロの対応。-ru は動詞語尾》
沼 (nu・numa) 《n~n, g^w~ゼロの対応。-ma は「場所」の意》
- ◆ nagisa (渚) という語は「水に洗われた所」が原義であり、インド・ヨーロッパ祖語の *neig^w- や古代中国語の niug (濡) に近い意味を保持している。一方、古代中国語の niüg (乳) は「ねっとりとしたもの」というのが原義であり、派生的な意味を表すようになっている。また、「やわらかい・やわらげる」を意味する古代中国語の niog (柔) や「やわらかいこと」を意味す

る古代日本語の niko (和) もそれらと同源の語であるが、もはや同じ単語家族の成員とは言えないほどの意味変化を遂げている。なお、アイヌ語にこれらの語と同じ単語家族に属する nay 「沢・川」や nun 「(水分を) 吸う」という語が存在する。

5. *kal 「うつくしい」・*gel 「あかるい」・*ger 「まがった」などとの対応

ここで扱うのは、インド・ヨーロッパ祖語の語頭音 $k \cdot k^w \cdot kw \cdot g \cdot g^w \cdot g^wh$ が古代中国語の $k \cdot k^h \cdot g \cdot g^h \cdot \eta \cdot \eta \cdot fi \cdot x$ と対応するとともに、インド・ヨーロッパ祖語の $l \cdot r$ が古代中国語の語末の r と対応している語である。このような語の組みあわせは少なくない。そして、同源であることが明瞭である。

- ㊦ *kal- 「うつくしい (beautiful)」
- ㊤ 綺 ($k^h iar$) 「あや・うつくしい」《 $k \sim k^h$, $l \sim r$ の対応》
- ㊦ *kal- 「むずかしい・つらい (hard)」
- *kar- 「むずかしい・つらい (hard)」
- ㊤ 苛 ($fiar$) 「からい・きつい」《 $k \sim fi$, $l \cdot r \sim r$ の対応》
- ㊥ 酷し・辛し ($karasi$) 《 $k \sim k$, $l \cdot r \sim r$ の対応。-si は形容詞語尾》
- ㊦ *kel- 「うつ・なぐる (strike)・きる (cut)；破片 (something broken or cut off)・小枝 (twig)・木片 (piece of wood)」
- ㊤ 壊 ($fiu\ddot{a}r$) 「やぶれる・こわれる・こわす」《 $k \sim fi$, $l \sim r$ の対応》
- 毀 ($xiuar$) 「こぼつ・こわす・やぶれる」《 $k \sim x$, $l \sim r$ の対応》
- ㊥ 伐る・樵る ($k\ddot{o}ru$) 《 $k \sim k$, $l \sim r$ の対応。「(枝や立木を) 切る」の意》
- 柿 ($kokera$) 《 $k \sim k$, $l \sim r$ の対応。「木の削りくず」の意。ko- は「木」の意》
- ㊦ *kel- 「もたれる・よりかかる (lean)・かたむく (tilt)」
- *klei- 「もたれる・よりかかる (lean)」
- ㊤ 寄 ($k iar$) 「よる・よりかかる・よせる」《 $k \sim k$, $l \sim r$ の対応》
- 倚 ($k iar$) 「かたむく」《 $k \sim k$, $l \sim r$ の対応》
- ㊥ 寄る ($y\ddot{o}ru$) 《 $k \sim y$, $r \sim r$ の対応》
- ㊦ *kel- 「おおう・おおいかくす (cover)・隠匿する (conceal)・たくわえる (save)」
- *kelp- 「にぎる (hold)・つかむ (grasp)」
- *krāu- 「隠匿する (conceal)・かくす (hide)」
- *krōpo- 「やね (roof)」
- *k^welp- 「アーチ状におおう (arch)」
- *k^wrep- 「からだ・身体 (body)」
- *gher- 「つかむ・つかまえる (grasp)・かこむ (enclose)」

- *ghreib- 「しっかりにぎる (grip)」
- ㊦ 裹 (kuar) 「つつむ・つつみ」《k・k^w・gh~k, 1・r~r の対応》
 𪛗 (fier) 「かくす・おおいかくす」《k・k^w・gh~fi, 1・r~r の対応》
 𪛗 (fiuər) 「かこむ・かこみ」《k・k^w・gh~fi, 1・r~r の対応》
- ㊦ 包む (kurumu) 《k・k^w・gh~k, 1・r~r の対応。-mu は動詞語尾》
 衣 (körömö) 《k・k^w・gh~k, 1・r~r の対応。kurumu (包む) に由来する形か》
 蔵・倉 (kura) 《k・k^w・gh~k, 1・r~r の対応》
 殻・軀 (kara) 《k・k^w・gh~k, 1・r~r の対応》
 体 (karada) 《k・k^w・g^h~k, 1・r~r の対応。-da は古代中国語の t^her (体) と同源か。インド・ヨーロッパ祖語の *k^wrep- と同様, 「魂をおおうもの」が原義》
 軀・身 (mukuro) 《k・k^w・gh~k, 1・r~r の対応。mu- は「身」の意》
 腹 (φara) 《k・k^w・gh~φ, 1・r~r の対応》
 裏・心 (ura) 《k・k^w・gh~ゼロ, 1・r~r の対応》
- ㊦ *kel- 「はいいろの (grey)・くろい (black)・くらい (dark)」
- ㊦ 盧 (xlag) 「つば・くろい・ひとみ」《k~x, 1~l の対応》
- ㊦ 黒 (kuro) 《k~k, 1~r の対応》
 闇・暗 (kura) 《k~k, 1~r の対応》
- ◆ この単語家族における「くろい」や「くらい」という意味は上記の「おおう」や「おおいかくす」という意味から派生したものである。したがって、この単語家族は上記の単語家族と縁続きということになる。
- ㊦ *kel- 「卓越・突出している (be prominent)；やま・おか (hill)」
 *kel- 「チクリとさす・つく (prick)」
 *ker- 「つの (horn)・あたま (head)」
 *glōgh- 「とげ (thorn)・さき・先端 (point)」
- ㊦ 嵬 (ŋuər) 「たかい」《k・g~ŋ, 1・r~r の対応》
 崎 (k^hər) 「けわしい」《k・g~k^h, 1・r~r の対応》
 埼 (giar) 「さき・山や陸地の先端」《k・g~g, 1・r~r の対応》
- ㊦ 薊 (ira) 《k・g~ゼロ, 1・r~r の対応。「とげ」の意》
 薨 (iraka) 《k・g~ゼロ, 1・r~r の対応。「屋根の背」が原義。-ka は「場所」の意》
- ㊦ *kleng- 「まげる・まわる (bend)・まわす・まわる (turn)」
 *klou- 「まげる・まがる (bend)」
 *kleu- 「かぎ・フック (hook)・くぎ (peg)」
 *k^welp- 「まわる (turn oneself)」
 *k^wel- 「回転させる (revolve)・うごきまわる (move around)・一時逗留する (sojourn)・住まう (dwell)」
 *gel- 「まるくなる・まるまる (form into a ball)」
 *gers- 「まわす・まわる (tern)・まげる・まがる (bend)」
 *ger- 「まがった (curving)・屈曲した (crooked)」
 *ghrendh- 「ひく・すりつぶす・つく (grind)」

- ㊦ 回 (fiuər) 「まわる・まわす」《k・k^w・g・gh~fi, l・r~r の対応》
 轆 (glök) 「ひく・車でござとふみくどく」《k・k^w・g・gh~g, l・r~l の対応》
- ㊧ 転ぶ (korobu) 《k・k^w・g・gh~k, l・r~r の対応》
 車 (kuruma) 《k・k^w・g・gh~k, l・r~r の対応》
 くるくる (kurukuru) 《k・k^w・g・gh~k, l・r~r の対応》
 枢 (kuru) 《k・k^w・g・gh~k, l・r~r の対応。「開き戸を回転させる仕掛け」の意》
- ㊨ *ker(ə)- 「あつさ・ねつ (heat)・ひ・ほのお (fire)」
 *ghel- 「ひかる・かがやく (shine)」
 *gher- 「ひかる・かがやく (shine)・白熱する (glow)；はいいろの (grey)」
 *g^wher- 「熱する (heat)・あたためる・あたたまる (warm)」
- ㊩ 暉 (xiuər) 「ひかり・かがやく」《k・gh・g^wh~x, r・l~r の対応》
 輝 (xiuər) 「かがやく・かがやき」《k・gh・g^wh~x, r・l~r の対応》
 輝 (xiuər) 「ひかり・かがやく」《k・gh・g^wh~x, r・l~r の対応》
- ㊪ きらきら (kirakira) 《重複形で, k・gh・g^wh~k, r・l~r の対応》
 煌めく (kirameku) 《k・gh・g^wh~k, r・l~r の対応。-meku は一種の動詞語尾》
 きらぎらし (kiragiras) 《重複形で, k・gh・g^wh~k・g, r・l~r の対応。-si は形容詞語尾》
 昼 (φiru) 《k・gh・g^wh~φ, r・l~r の対応》
 うらうら (uraura) 《重複形で, k・gh・g^wh~ゼロ, r・l~r の対応》
- ◆ φiru (昼) という語は昼間の「あかるさ」に着目した命名であると考えられる。

- ㊫ *kerd- 「こころ・心臓 (heart)」
- ㊬ 懐 (fiuər) 「いだく・おもう・おもい」《k~fi, r~r の対応》
- ㊭ 心 (kōkōrō) 《重複形の*kōrōkōrō に由来。k~k, r~ゼロ・r の対応》
 懐 (φutokoro) 《k~k, r~r の対応。-φuto は utu・uti (内) と同源か》
- ◆ これらの語も上記のインド・ヨーロッパ祖語*kel- や古代中国語の fier(𠂔)などの派生語であり、その原義は「おおわれたもの」であったと考えられる。

- ㊮ *krek- 「おる・あむ (weave)・うつ・たたく (beat)」
 *kret- 「うつ・たたく (beat)」
 *kreuə- 「おす・つく (push)・うつ・なぐる (strike)」
- ㊯ 擽 (ŋhiak) 「うつ・くどく」《k~ŋ, r~l の対応》
- ㊰ *krek- 「カエルのたまご (frog spawn)・さかなのたまご (fish eggs)」
- ㊱ 卵 (gluan) 「たまご」《k~g, r~l の対応》
 塊 (k^huər) 「つちくれ・かたまり」《k~k^h, r~r の対応》
- ㊲ 塊 (kure) 《k~k, r~r の対応。「かたまり」の意》
- ◆ これらは石ころのような「ころっとしたもの」のイメージに根ざした語である。
- ㊳ *kret- 「ゆさぶる・ゆれる (shake)」
 *krei- 「ふるう・ふるいにかける (sieve)・ふるえる (tremble)」
 *kreut- 「アシ・ヨシ (reed)；ゆさぶる・ゆれる (shake)・ふるえる (tremble)」
- ㊴ 揮 (xiuər) 「ふるう・ふりまわす」《k~x, r~r の対応》

- ㊦ 揮る・振る (φuru) 《k~φ, r~r の対応》
震ふ・振ふ・篩ふ (φuruφu) 《k~φ, r~r の対応。-φu は動詞語尾》
- ㊦ *k^wer- 「つくる (make)」
- ㊦ 為 (fiuar) 「なす・つくる」 《k^w~fi, r~r の対応》
- ㊦ へがる (garu) 《k^w~g, r~r の対応。形容詞語幹・名詞に付く動詞語尾。通説では、「見た目の様子」を表す接尾語の -ga に動詞語尾の -ru が付いた形と言われる》
- ◆ アイヌ語の kar 「つくる」 もこれらと同源である。
- ㊦ *ghrebh- 「ほる・ほりおこす (dig)・ほうむる・うめる (bury)・ひっかく (scratch)」
- ㊦ 罎 (kuār) 「えぐる・まるく穴をあける・くりぬく」 《gh~k, r~r の対応》
- ㊦ 剝る (kuru) 《gh~k, r~r の対応》

6. *kap- 「つかむ」・*kem- 「おおう」・*g^wēbh- 「ひたす」 などとの対応

次に取りあげるのは、インド・ヨーロッパ祖語の語頭音 k・g・gh・g^w が古代中国語の語頭音 k・k^h・g・fi・ゼロ形態と対応するとともに、インド・ヨーロッパ祖語の p・b・bh・mp・m の音が古代中国語の語末の p・b・m・n と対応している語である。このような語の組みあわせは少ない。

- ㊦ *kap- 「つかむ・つかまえる (grasp)」
- ㊦ 柙 (fiāp) 「おり・とらえる・おさめる」 《k~fi, p~p の対応》
押 (āp) 「おす・おしかぶせておさえる」 《k~ゼロ, p~p の対応》
- ㊦ 柵 (kuφe) 《k~k, p~φ の対応。「木・竹で作った垣」の意》
- ㊦ *kem- 「おおう・おおいかくす (cover)」
- ㊦ 蓋 (kab) 「おおう・ふた」 《k~k, m~b の対応》
甲 (kāp) 「かぶと・よろい」 《k~k, m~p の対応》
篋 (k^hāp) 「はこ」 《k~k^h, m~p の対応》
狭 (fiāp) 「せまい・せばめる・せばまる」 《k~fi, m~p の対応》
擒 (giām) 「とらえる・とりこ」 《k~g, m~m の対応》
含 (fiām) 「ふくむ」 《k~fi, m~m の対応》
冠 (kuan) 「かんむり」 《k~k, m~n の対応》
- ㊦ 含む (kukumu) 《重複形の*kumukumu に由来。k~k, m~ゼロ・m の対応》
被る・冠る (kagaφuru) 《重複形の*kabukaφuru に由来。kabu- は「頭・株」の意で、「頭をおおいかくす」が原義。kagaφuru > kauburu > kaburu > kamuru と変化した。k~g, m~φ の対応。-ru は動詞語尾》
髪 (kami) 《k~k, m~m の対応》
兜・冑・甲 (kabuto) 《k~k, m~b の対応。朝鮮語の kap 「よろい」と ot 「ころも」の複合形と言われる》

蜘蛛 (kumo) 《k~k, m~m の対応。獲物を捕獲するクモの巣に着目した命名》

皮 (kaɸa) 《k~k, m~ɸ の対応》

峽 (kaɸi) 《k~k, m~ɸ の対応。「山あいの谷間」の意》

- ◆ 朝鮮語の ɡɔmi 「クモ」やアイヌ語の kap 「かわ・皮膚・獣皮・樹皮」も、これらと同じ単語家族に属する。

㊦ *kem- 「圧縮する (compress)」

㊧ 梱 (k^huən) 「しばる・ひきしめてまるくしばる」《k~k^h, m~n の対応》

撃 (k^hən) 「かたい・しめる」《k~k^h, m~n の対応》

㊨ 込む・籠む (kōmu) 《k~k, m~m の対応》

組む (kumu) 《k~k, m~m の対応》

- ◆ kōme (米) という語もこれらと同源で、「籾殻の中に固く閉じ込められたもの」というのが原義であったように思われる。片山 (2004: 143) が kōme (米) という語の起源を次のように述べているのは卓見である。

「コメ」という日本語に関して、アイヌ語のコム (kom [どんぐり]) との関係を私は否定しきれないでいる。縄文時代の主食「どんぐり」を kōm と呼んできて、新しい主食である米を同じ名でとらえたのではないかと考えられるからである。

㊦ *kem(ə)- 「つかれる (be tired)・つかれさせる (tire)」

㊧ 倦 (ɡuan) 「つかれる・うむ」《k~g, m~n の対応》

㊨ 倦む (umu) 《k~ゼロ, m~m の対応》

憂し (usi) 《k~ゼロ, m~ゼロの対応。-si は形容詞語尾》

㊦ *kamer- 「まげる・まがる (bend) ; 丸天井 (vault)」

*kamp- 「まげる・まがる (bend)」

㊧ 蜷 (ɡuan) 「まがる」《k~g, m・mp~n の対応》

㊨ 曲・隈・隅 (kuma) 《k~k, m・mp~m の対応。「道や川の曲がり込んだ所」の意》

㊦ *kob- 「あう・適する (suit)・適合する (fit)・うまくいく (succeed)」

㊧ 合 (fiəp) 「あう・あわせる」《k~fi, b~p の対応》

協 (fiāp) 「あわせる・かなう」《k~fi, b~p の対応》

㊨ 合ふ (aɸu) 《k~ゼロ, b~ɸ の対応》

㊦ *geph-・gebh- 「あご (jaw)・くち (mouth)」

㊧ 頬 (kāp) 「ほお」《g~k, ph・bh~p の対応》

㊨ 頬 (ɸoɸo) 《g~ɸ, ph・bh~ɸ の対応》

㊦ *ghabh-・ghebh- 「あたえる (give)・うけとる (receive)」

㊧ 給 (kiəp) 「たりる・たす・あたえる・たまう」《gh~k, bh~p の対応》

㊨ 賦る・配る (kubaru・kumaru) 《gh~k, bh~b・m の対応。-ru は動詞語尾》

㊦ *g^wēbh- 「ひたす・ひたる (dip)・しずむ (sink)」

㊧ 涵 (fiəm) 「ひたす・たつぷりと水の中につける」《g^w~fi, bh~m の対応》

㊨ 浸む (komu) 《g^w~k, bh~m の対応。「水浸しになる」の意》

7. *ped- 「あし」・*pet(ə)- 「つきすすむ」・*mad 「ぬれた」 などとの対応

ここに示す語は、インド・ヨーロッパ祖語の語頭音 $p \cdot p^h \cdot bh \cdot m$ ・ゼロ形態が古代中国語の語頭音 $p \cdot p^h \cdot b \cdot m$ と対応するとともに、インド・ヨーロッパ祖語の $t \cdot d \cdot zg$ ・ゼロ形態が古代中国語の語末の $t \cdot d$ と対応している語である。この種の語の組みあわせはきわめて少数である。

- ㊦ *ped- 「あし (foot)」
- ㊦ 匹 ($p^h iet$) 「たぐい・一対をなすもの」《 $p \sim p^h$, $d \sim t$ の対応》
- 疋 ($p^h iet$) 「対になる」《 $p \sim p^h$, $d \sim t$ の対応》
- 跋 ($buat$) 「いく・ふむ」《 $p \sim b$, $d \sim t$ の対応》
- ㊦ 足 (asi) 《 $p \sim$ ゼロ, $d \sim s$ の対応》
- 走る ($\phi asiru \cdot wasiru$) 《 $p \sim \phi \cdot w$, $d \sim s$ の対応。-ru は動詞語尾》
- 二 (ϕuta) 《 $p \sim \phi$, $d \sim t$ の対応》
- 二十 (ϕata) 《 $p \sim \phi$, $d \sim t$ の対応》
- ◆ 「足」という基本義から「一対・二・二十」という意味、また「行く・走る・踏む」という意味が派生したと考えられる。
- ㊦ *pet(ə)- 「つきすすむ (rush) ・とぶ (fly)」
- *bhā- 「ひかる・かがやく (shine)」
- *as- 「もえる・もやす (burn) ・白熱する・ひかる (glow)」
- *aus- 「ひかる・かがやく (shine)」
- *əster- ・*ster- 「ほし (star)」
- ㊦ 発 ($piuāt$) 「はなつ」《 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim p$, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim t$ の対応》
- 撥 ($puat$) 「はねる」《 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim p$, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim t$ の対応》
- 潑 ($p^h uat$) 「水がこぼれおちる」《 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim p^h$, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim t$ の対応》
- 浮 ($buat$) 「水がわきたつ」《 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim b$, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim t$ の対応》
- 晡 ($p^h uət$) 「日がのぼる・日の出」《 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim p^h$, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim t$ の対応》
- 髮 ($piuāt$) 「かみ」《 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim p$, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim t$ の対応》
- ㊦ 弾く ($\phi aziku$) 《 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim \phi$, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim z$ の対応。-ku は動詞語尾》
- 馳す (ϕasu) 《 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim \phi$, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim s$ の対応》
- 迸る ($\phi odo\phi asiru$) 《重複形で, $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim \phi$, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim d \cdot s$ の対応。-ru は動詞語尾。
 $\phi odo-$ は $\phi odo ku$ (解く) ・ $\phi odo koso$ (施す) の $\phi odo-$ に同じとする考えは誤り》
- 熱る ($\phi oto\phi oru$) 《重複形の * $\phi oto\phi otoru$ に由来。 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim \phi$, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim t \cdot$ ゼロの対応》
- 熱し ($atusi$) 《 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim$ ゼロ, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim t$ の対応。-si は形容詞語尾》
- 星 (ϕosi) 《 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim \phi$, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim s$ の対応》
- 朝 (asa) 《 $p \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim$ ゼロ, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim s$ の対応》
- 明日 (asu) 《 $b \cdot bh \cdot$ ゼロ $\sim$ ゼロ, $t \cdot s \cdot$ ゼロ $\sim s$ の対応。asa (朝) の母音交替形。本来は「朝」の意である》

東 (aduma) 《p・bh・ゼロ～ゼロ, t・s・ゼロ～d の対応。-ma は「所」の意。Asia 「アジア」や east 「東」という語と同様, 「日出づる地」が原義》

- ◆ この単語家族には, その原義として「ぱつと」という様態を表す意味が内包されている。水がこぼれ散ったり, 光が放たれたりするのは, そういうさまである。髪の毛も頭から発散するように生えている。ちなみに, 「髪」という漢字はそういう象形である。

一方, 星というのは光が発せられる所, 朝は日の光が放射されはじめる時, すなわち本来は曙光にふれる時である。そして, 光が放たれるということは熱気を帯びるということである。ここに示した語はそういうふうな, ゆるやかな単語家族を構成している。

ところで, 「足」を意味する上記のインド・ヨーロッパ祖語 *ped- は, 日本語の asi (足) も同じだが, 胴体からぱつと飛び出し, 突き出ている身体部位の名称であり, その意味においてここに示した語と縁続きである。

- ㊦ *medhu- 「はちみつ (honey) ・ はちみつ酒 (mead)」
- ㊦ 蜜 (miet) 「はちみつ」 《m～m, dh～t の対応》
- ㊦ *mad- 「しめった (moist) ・ ぬれた (wet) ; 脂・肉汁がしたたる (dripping with fat) ・ 脂肪質の・油っこい (fatty)」
- *mezg- 「ちょっとひたす (dip) ・ とびこむ (plunge)」
- *meu- 「ぬれた (wet) ・ じめじめした (damp)」
- ㊦ 泌 (piet・pied) 「汁がしぼりだされる・汁をしぼりだす」 《m～p, d・zg・ゼロ～t・d の対応》
- ㊦ 水 (midu・mi) 《m～m, dh・zg・ゼロ～d・ゼロの対応》
- 溝 (mizö) 《m～m, dh・zg・ゼロ～z の対応》
- 涙 (namita・namida) 《m～m, dh・zg・ゼロ～t・d の対応。na- は朝鮮語の nun-mil 「なみだ」 (「目の水」が原義) の nun- と同源。また古代中国語の nǎn (眼) とも同源》
- ◆ 「湿潤・べつとりとしたさま」が原義で, アイヌ語の pet- 「水分のある」, pet 「川」, pe 「水・水分・汁気・しずく」も同源の語である。上記の「はちみつ」を意味する *medhu- と縁が近い。

8. *pel 「かわ」・*pūr 「ひ・ほのお」・*bhreg 「こわす」 などとの対応

ここではインド・ヨーロッパ祖語の語頭音 p・bh が古代中国語の語頭音 p・p^h・b・m・m と対応するとともに, インド・ヨーロッパ祖語の l・r が古代中国語の語末音の r と対応している語を取りあげる。このような語の組みあわせもその数はきわめて限られているが, 重要な点では他のひけをとらない。

- ㊦ *pel- 「かわ・皮膚 (skin) ・ 獣皮 (hide)」
- *pleus- 「ひきぬく (pluck) ・ はね・羽毛 (feather) ・ 毛被・羊毛 (fleece)」
- ㊦ 皮 (biar) 「かわ」 《p～b, l～r の対応》
- 剥 (plūk) 「はぐ・むく」 《p～p, l～l の対応》
- ㊦ 鱗 (iroko・uroko) 《p～ゼロ, l～r の対応。-ko は「場所」の意》
- 保呂 (φoro) 《p～φ, l～r の対応。「鷹の両翼の下」の羽毛」の意》

- ◆ インド・ヨーロッパ祖語の *welə- 「羊毛 (wool)」は p 音が w 音に弱化した同源の語であり、アイヌ語の ur「かわ・毛皮・毛皮の衣類」は p 音が消失した同源の語であろう。日本語の *φagu* (剥ぐ) と *muku* (剥く) もこれらの語と関係がありそうである。

- ㊦ *pelə- 「たいらな (flat) ; ひろげる・ひろがる (spread)」
 *plāk- 「たいらである (be flat)」
 *plāt- 「ひろげる・ひろがる (spread)」
 ㊧ 披 (*p^hiar*) 「ひらく」《p~p^h, l~r の対応》
 播 (*puar*) 「まく」《p~p, l~r の対応》
 弥 (*miēr*) 「あまねし・広くいきわたっている」《p~m, l~r の対応》
 瀾 (*mier*) 「はびこる・一面にみちる」《p~m, l~r の対応》
 ㊨ 開く (*φiraku*) 《p~φ, l~r の対応。-ku は動詞語尾》
 平 (*φira*) 《p~φ, l~r の対応》
 広ぐ (*φirogu*) 《p~φ, l~r の対応。-gu は動詞語尾》
 原 (*φara*) 《p~φ, l~r の対応》
 遙遙 (*φarubaru*・*φarobaro*) 《p~φ, l~r の対応》

- ◆ ドイツ語の *meer* 「海」、フランス語の *mer* 「海」の祖形とされるインド・ヨーロッパ祖語の *mori- 「水塊 (body of water)・湖 (lake)・海 (sea)」は、古代日本語の「海原 (*unaφara*)」の -*φara* と同じイメージに根ざした語かもしれない。そうであれば、この *mori- もここに示した語と同源である。

- ㊦ *pleu- 「ながれる・ながす (flow)」
 ㊧ 飛 (*piuər*) 「とぶ・とばす」《p~p, l~r の対応》
 風 (*pluəm*) 「かぜ」《p~p, l~l の対応》

- ◆ 朝鮮語の *haram* 「風」や *bu: l-* 「(風が) ふく・(息を) ふく・(笛などを) ふく」はこれらと同源である。

- ㊦ *pōl- 「ふれる (touch)・さわる・感じる (feel)・ゆさぶる・ゆれる (shake)」
 ㊧ 批 (*p^her*) 「うつ・ふれる」《p~p^h, l~r の対応》
 ㊨ 触る (*φuru*) 《p~φ, l~r の対応》

- ㊦ *pūr 「ひ・ほのお (fire)」
 *bhel 「ひかる・かがやく (shine)・ひらめく (flash)・もえる・もやす (burn) ; あかるい白とあかるい種々の色 (shining white and various bright colours) ; ひ・ほのお (fire)」
 *bher- 「にる (cook)・やく (bake) ; あかるい (bright)・褐色の (brown)」
 *bherək- 「ひかる・かがやく (shine)・きらめく (glitter)」
 *bheræg- 「ひかる・かがやく (shine) ; あかるい (bright)・しろい (white)」
 *bhreu- 「沸騰する (boil)・あわだつ (bubble)・発泡する (effervesce)・もえる・もやす (burn)」
 ㊧ 火 (*muər*) 「ひ」《p・bh~m, r・l~r の対応》
 ㊨ 火 (*φo・φī・φu*) 《p・bh~φ, r・l~ゼロの対応》
 炙る (*aburu*) 《p・bh~b, r・l~r の対応。a- は φo・φī・φu (火) の弱形か》
 閃く (*φirameku*) 《p・bh~φ, r・l~r の対応。-meku は一種の動詞語尾》
 ひらひら (*φiraφira*) 《p・bh~φ, r・l~r の対応。「光のひらめくさま」の意》

春 (ɸaru) 《p・bh~ɸ, r・l~r の対応》

めらめら (meramera) 《p・bh~m, r・l~r の対応。「炎がもえあがるさま」の意》

- ◆ インド・ヨーロッパ祖語の *pur- は朝鮮語の ɸul 「ひ・ほのお」ともよく似ている。なお日本語の ɸaru (春) という語は、春の「あたたかさ」に着目した命名であろう。

㊦ *bher- 「きる (cut)・刺しとおす (pierce)・あなをあける (bore)」

*bherdh- 「きる (cut)」

*bhreg- 「こわす・わる・やぶる (break)」

*bhreus- 「こわす・わる・やぶる (break)」

*bhreu- 「きる (cut)・ばらばらにする (break up)」

㊧ 破 (p^huar) 「やぶる・やぶれる・わる」《bh~p^h, r~r の対応》

㊨ 割る・破る (waru) 《bh~w, r~r の対応》

破る (yaburu) 《重複形*yaruburu に由来。bh~y・b, r~ゼロ・r の対応》

ほろ (ɸörö)・ほろほろ (ɸöröɸörö) 《bh~ɸ, r~r の対応》

亡ぶ (ɸöröbu) 《bh~ɸ, r~r の対応。-bu は動詞語尾》

- ◆ アイヌ語の pere 「やぶる・わる」, par 「くち」, por 「ほら穴」や日本語の ɸora 「洞」, uro 「虚」, ura 「浦」などもこれらと同源であろう。

9. *pak 「しばる」・*bheug- 「にげる」・*meik- 「まぜる」などとの対応

ここで扱う語は、インド・ヨーロッパ祖語の語頭音 p・bh・m が古代中国語の p・p^h・b・m と対応するとともに、インド・ヨーロッパ祖語の k・g・g^w が古代中国語の語末の k・g・ŋ・n と対応しているいくつかの組みあわせである。

㊦ *pak-・*pāg- 「しばる・むすびつける・しめる (fasten)」

㊧ 縛 (biuak) 「しばる」《p~b, k・g~k の対応》

㊦ *peku- 「富・財 (wealth)・動産 (movable peoperty)」

㊧ 富 (piuəg) 「とむ・とます・ゆたか」《p~p, k~g の対応》

福 (piuək) 「さいわい」《p~p, k~k の対応》

豊 (p^hioŋ) 「ゆたか・ゆたかにする」《p~p^h, k~ŋ の対応》

㊦ *bheug- 「にげる (flee)」

*bheg^w- 「はしりさる (run away)」

㊧ 亡 (miaŋ) 「ほろびる・ほろぼす・にげる」《bh~m, g・g^w~ŋ の対応》

㊦ *bhugo- 「動物のおす (male animal of various kinds); 雄鹿 (stag)・雄羊 (ram)・雄ヤギ (he-goat)」

㊧ 牡 (mog) 「おす」《bh~m, g~g の対応》

冒 (mog) 「おおう・おかす」《bh~m, g~g の対応》

㊨ 犯す・侵す (wokasu) 《bh~w, g~k の対応。-su は動詞語尾》

- イ *mak 「〈皮の〉ふくろ (〈leather〉 bag)」
- 甲 包 (p^hōg) 「つつむ」《m~p^h, k~g の対応》
 腹 (piuk) 「はら」《m~p, k~k の対応》
 匏 (böğ) 「ひさご・ふくべ」《m~b, k~g の対応》
 服 (biuək) 「ふく」《m~b, k~k の対応》
 佩 (buəg) 「おびる・はく」《m~b, k~g の対応》
- 乙 含む (φukumu) 《m~φ, k~k の対応。-mu は動詞語尾》
 佩く・着く・穿く (φaku) 《m~φ, k~k の対応》
 箱・函・筥 (φako) 《m~φ, k~k の対応》
 瓠・瓢 (φukube) 《m~φ, k~k の対応。φukumu (含む) に由来する形か》
- イ *meg- 「おおきい (great)」
- 甲 尨 (mŭŋ) 「おおきい・むくいぬ」《m~m, g~ŋ の対応》
- イ *meik- 「まぜる (mix)」
- 甲 扮 (piuən) 「まぜる」《m~p, k~n の対応》
 紛 (p^hiuən) 「まぎれる・まがう」《m~p^h, k~n の対応》
- 乙 紛る (magiru) 《m~m, k~g の対応。-ru は動詞語尾》
 紛ふ (magaφu) 《m~m, k~g の対応。-φu は動詞語尾》

10. *tep- 「あたたかい」・*seip- 「そそぐ」などとの対応

ここで取りあげるのは、インド・ヨーロッパ祖語の語頭音 t・d・s が古代中国語の語頭音 t・th・ts・ts^h・d・d̥・s と対応するとともに、インド・ヨーロッパ祖語の p・b・m が古代中国語の語末の p・m・n と対応している語である。これらの語の組みあわせもその数はわずかではあるが、以下に示すように、日本語との対応関係において非常に興味深いものを含んでいる。

- イ *tep- 「あたたかい (be warm)」
- 甲 燖 (ḍiǎm) 「あたためる」《t~ḍ, p~m の対応》
 閃 (thiam) 「ひらめく・きらめく・閃光・いなずま」《t~th, p~m の対応》
 燦 (ts^han) 「あざやかで美しいさま・くっきりと輝くさま」《t~ts^h, p~n の対応》
- 乙 暖む・温む (atatamu) 《t~t, p~m の対応。ata- は atu (熱) と同源と見なされる》
 点す・燈す・炷す (tömösu) 《t~t, p~m の対応。-su は動詞語尾》
- イ *tem(ə)- 「きる (cut)」
- 甲 断 (duan) 「たつ・きる」《t~d, m~n の対応》
- イ *dem(ə)- 「いえ (house)・家庭 (household)」
- 甲 殿 (duen) 「との・おおきな建物」《d~d, m~n の対応》
- 乙 殿 (tönö) 《d~t, m~n の対応》

- ㊦ *seip-・seib- 「そそぐ・つぐ・ながす (pour out)」
 *sem- 「そそぐ・つぐ (pour)・水をぬく・排水する (draw water)」
- ㊧ 湿 (thiəp) 「しめる・うるおす」《s~th, p・b・m~p の対応》
 浹 (tsāp) 「うるおす・うるおう」《s~ts, p・b・m~p の対応》
 唼 (sāp) 「すする」《s~s, p・b・m~p の対応》
 沾 (tam) 「うるおう・うるおす」《s~t, p・b・m~m の対応》
 浸 (tsiəm) 「しみる・ひたす」《s~ts, p・b・m~m の対応》
 泌 (ts^hiəm) 「しみる」《s~ts^h, p・b・m~m の対応》
 滲 (siəm) 「しみる」《s~s, p・b・m~m の対応》
- ㊨ 湿る (simeru) 《s~s, p・b・m~m の対応。-ru は動詞語尾》
 湿す (simesu) 《s~s, p・b・m~m の対応。-su は動詞語尾》
 浸む (simu) 《s~s, p・b・m~m の対応》
 染む・初む (sömu) 《s~s, p・b・m~m の対応》
 島 (sima) 《s~s, p・b・m~m の対応。「水浸しの所」が原義》
 さめざめ (samezame) 《重複形で, s~s・z, p・b・m~m の対応》
 五月雨 (samidare) 《s~s, p・b・m~m の対応。-dare は「垂れ」の意》
 春雨 (φarusame)・秋雨 (akisame) 《s~s, p・b・m~m の対応》
 大雨 (φisame) 《s~s, p・b・m~m の対応。φi- は φitu (漬つ) や φisi (洲) と同源》
 氷雨 (φisame) 《s~s, p・b・m~m の対応。φi- は φi (氷) と同源》
 唾 (tuφa) 《s~t, p・b・m~φ の対応。「つば」の意》
- ◆ φarusame (春雨)・akisame (秋雨) の -same という発音はかねてより不審に思っていたが、このような単語家族をつくってみると、その理由が了解される。なお, sima (島) という語について金久 (2011: 10) は次のように言うが、同調できない。
- 「しま」の根本的観念は、本来は海に対し足場となる陸地を意味し、ス (洲)、セ (瀬) などと関係のある語ではないかと思われる。その意味が分化して、水中に孤立した陸地、すなわち今日の島および国と同じ意味の観念になったのではあるまいか。
- 後述するように, su (洲) は φisi (洲) や iso (后幾) と同源である。一方, se (瀬) は「浅瀬の水がさらさらと流れる」を意味する「せせらく」の sese- や古代中国の diet (洑)「あふれる・水があふれてこぼれる」と同源である

- ㊦ *sem- 「ひとつ (one)」
- ㊧ 単 (tan) 「ひとえ・ただひとつ」《s~t, m~n の対応》

11. *wed- 「はなす」・*weik 「氏族」・*wegh- 「いく」などとの対応

ここで扱うのは、語頭音が w のインド・ヨーロッパ祖語とそれに対応する古代中国語と古代日本語である。この w 音は、私見では、(1) k・kh・g・g^w などが弱化したものと、(2) p・bh・m が弱化したものとに分かれる。なお以下に示す古代中国語と古代日本語の中には、本稿の別の箇所にて記載されたものがいくつか含まれている。

㊦ *wadh- 「いく (go)」

㊧ 去 (k^hiat) 「さる・いく」《w~k^h, dh~t の対応》

㊨ 徒・徒歩 (kati・kasi) 《w~k, dh~t・s の対応》

◆ *wadh- は 9 頁に示した *ked- と同源であろう。

㊦ *wed- 「はなす (speak)」

㊧ 日 (fiuāt) 「いう・いわく」《w~fi, d~t の対応》

謂 (fiuəd) 「いう」《w~fi, d~d の対応》

話 (fiuād) 「はなす・はなし」《w~fi, d~d の対応》

㊨ 語る (kataru) 《w~k, d~t の対応。-ru は動詞語尾》

言 (kötö) 《w~k, d~t の対応》

◆ *wed- は 11 頁に示した *g^wet- と同源であろう。なお, k・k^h などの音が弱化した fi の音を含む古代中国語の fiuāt・fiuəd・fiuād は現代中国語でそれぞれ yuē・wèi・xuà となっている。

㊦ *wed- 「みず (water)」; ぬれた (wet)」

㊧ 泌 (piet・pied) 「汁がしぼりだされる・汁をしぼりだす」《w~p, d~t・d の対応》

㊨ 漬つ・沾つ (φitu) 《w~φ, d~t の対応。「びっしょりぬれる」の意》

漬る (φitaru)・漬す (φitasu) 《w~φ, d~t の対応。-ru と -su は動詞語尾》

潤ぶ (φotobu) 《w~φ, d~t の対応。-bu は動詞語尾。「ふやける」の意》

漁る (asaru・izaru) 《w~ゼロ, d~s・zn 対応。-ru は動詞語尾》

海 (wata) 《w~w, d~t の対応》

渡る (wataru) 《w~w, d~t の対応。-ru は動詞語尾》

泥 (φidi) 《w~φ, d~d の対応。「どろ」の意》

洲 (φisi) 《w~φ, d~s の対応。「す (洲)」の意》

洲 (su) 《w~ゼロ, d~s の対応。φisi (洲) と同様, 「びしょぬれの所」が原義》

磯 (iso) 《w~ゼロ, d~s の対応。「びしょぬれの所」が原義》

おし (osi) 《w~ゼロ, d~s の対応。「磯」の意の東国方言》

汗 (ase) 《w~ゼロ, d~s の対応》

うたかた (utakata) 《w~ゼロ, d~t の対応。-kata は古代中国語の kād (芥)「あくた・小さいごみ」と同源。したがって, utakata 「あわ」の原義は「水のごみ」である》

◆ これらの語は 21 頁に示した *mad- や midu (水) と同源である。したがって語頭の m が弱化するか消失するかした形態であると見なすこともできるが, 古代中国語の piet (泌) やアイヌ語の pet 「川; 水分のある」あるいは pe 「水・汁気・水分・しずく」という語があることから判断して, もとは p の音であったと見る方が適切ではないと思われる。

ところで片山 (2004:125-28) が指摘するように, 古代日本語の φisi (洲) はアイヌ語の pis (浜) と同源である。しかし, pis の祖形とされる *pit が pi-ot [小石・群在する] と分析されるといふ片山の解釈は誤っている。また片山は, p 音が p → h → k という変化をするとして, φisi (洲) から kisi (岸) が生まれたと言うが, このような変化は起こるまい。というのも, たとえばインド・ヨーロッパ祖語の k 音がゲルマン語派ですべて h 音に変わったように, k → h という変化は起こりえるが, その反対の変化は起こりそうにないからである。

㊦ *weid- 「みる・みせる (see)」

- ㊦ 瞥 (p^hiat) 「ちらつとみる」《w~p^h, d~t の対応》
- ㊧ *weidh- 「わかつ・わかれる (divide)・ひきはなす・分離する (separate)」
- ㊨ 別 (biat) 「わける・わかれる・わかれ」《w~b, dh~t の対応》
- ㊩ 隔つ (φedatu) 《w~φ, dh~d の対応。-tu は動詞語尾》
 隔る (φedataru) 《重複形の *φedaφedaru に由来。w~φ・ゼロ, dh~d・t の対応》
 隔隔 (φedaφeda) 《重複形で, w~φ, dh~d の対応。「へだたっているさま」の意》
- ㊪ *welə- 「羊毛 (wool)」
- ㊫ 皮 (biar) 「かわ」《w~b, l~r の対応》
 剥 (plūk) 「はぐ・むく」《w~p, l~r の対応》
- ㊬ 鱗 (iroko・uroko) 「w~ゼロ, l~r の対応。-ko は「場所」の意。」
 保呂 (φoro) 《w~φ, l~r の対応。「鷹の両翼の下羽毛」の意》
- ◆ *welə- は 19 頁に示した *pel- と同源であろう。
- ㊭ *weik- 「氏族・一族 (clan)」
- ㊮ 派 (p^hēg) 「わかれ・わかれる」《w~p^h, k~g の対応》
- ㊯ 分く・別く (waku) 《w~w, k~k の対応》
 散る・分る・離る (akaru) 《w~ゼロ, k~k の対応。-ru は動詞語尾。「集まっているものが散り散りばらばらになる」の意。この語は aku (明く) や aku (開く) と同源と言われるが, aku (明く) は古代中国語の miǎn (明) と同源である》
 脇・腋 (waki) 《w~w, k~k の対応》
 別 (wakē) 《w~w, k~k の対応。「上代, 天皇を祖先とする皇別の氏が持つ姓 (かばね) の一」(『岩波古語辞典』)》
- ㊰ *weg^wh- 「説教する (preach)・のたまう (speak solemnly)」
- ㊱ 諤 (ŋak) 「いう・ごつごつと直言する」《w~ŋ, g^hh~k の対応》
 言 (ŋiǎn) 「いう・いうこと」《w~ŋ, g^wh~n の対応》
- ◆ *weg^wh- は 12 頁に示した *kens- と同源であろう。
- ㊲ *weik-・weig 「まげる・まがる (bend)・まがりくねる (wind)」
 *weng- 「まげる・まがる (bend)・湾曲する (curve)」
 *wag- 「曲線・屈曲 (curve)；まがっている・湾曲している (be curved)」
 *wendh- 「まわす・まわる (turn)・まがりくねる (wind)・よろめく (weave)」
- ㊳ 曲 (k^hiūk) 「まがる・まげる」《w~k^h, k・ng・g・n~k の対応》
- ㊴ 綯 (wagu) 《w~w, k・ng・g・n~g の対応。「たわめ曲げる」の意》
 輪 (wa) 《w~w, k・ng・g・n~ゼロの対応》
 曲ぐ (magu) 《w~m, k~g の対応》
- ◆ これらの語は, インド・ヨーロッパ祖語の *keu- 「まげる・まがる (bend)；まるい〔空洞の〕もの (round [hollow] object)」や 12 頁に示した「かかと・あしの関節」を意味する *kenk- と同源である。日本語の wa (輪) は, wagu (綯ぐ) の wa- が語幹で -gu が語尾であると意識されるようになって生まれたと考えられる。ところで, magu (曲ぐ) は同源の語ではないように思われるかもしれないが, 語頭の m 音はおそらく k・g の音に由来する。ちなみに, インド・

ヨーロッパ祖語では g^wh の音は $k \cdot g$ のみならず、 $m \cdot b \cdot v \cdot f \cdot h \cdot w \cdot th$ などの音に変化した。たとえば、17 頁に示したインド・ヨーロッパ祖語の $*g^wher-$ 「熱する・あたためる・あたたまる」という語根から *burn*, *warm*, *furnace*, *hornito*, *therm* などの語が生まれた。

- ㊦ $*weg-$ 「つよい (*be strong*) ・活発である (*be lively*)」
- ㊧ 強 (*gjarŋ*) 「つよい」《 $w \sim g$, $g \sim ŋ$ の対応》
- ◆ $*weg-$ は 13 頁に示した $*ken-$ 「活発である」と同源であると思われる。
- ㊦ $*wegh-$ 「いく (*go*) ・乗物ではこぶ・輸送する (*transport in a vehicle*)」
- ㊧ 行 (*fiǵŋ*) 《 $w \sim fi$, $gh \sim ŋ$ の対応》
- ㊧ 行く (*yuku \cdot iku*) 《 $w \sim y$ ・ゼロ, $gh \sim k$ の対応》
- ◆ インド・ヨーロッパ祖語の $*ghē-$ 「はなつ (*release*) ・いかせる (*let go*) ; はなたれる (*be released*) ・いく (*go*)」は、 $*wegh-$ の $we-$ に対応する形態をとどめ、 $*wegh-$ の $-gh-$ に対応する形態を消失した語であると推定される。

おわりに

再度、強調して言えば、言語の単一起源説は人類学あるいは言語学が逢着すべき当然のなりゆきである。この点について、私は人を驚かせるような目新しいことを述べているつもりはない。はじめに断ったように、本稿の狙いはそのような考えを言語学的に裏打ちすることであった。作業の結果は見てのとおりだが、ここからどういう結論が得られるのか。先史言語研究の将来をも展望しながら、そのことにふれておこう。

(1) 言語変化は想像以上に緩慢であった

現生人類が現れた 20 万年前はおろか、彼らが出エジプトをはたした 5~6 万年前のことでさえ、私にとっては、想像を絶する遠い宇宙の天体現象のごときものであった。しかし、インド・ヨーロッパ祖語と古代中国語と古代日本語の単語家族の発掘作業を終えた今は、何か先史人たちの息吹が身近に感じられるようになった。

言わんとする意味はこうである。本稿は世界の諸言語が一つであったことを証左する断片もしくは痕跡を発見しようとはじめてたものであったのだが、思いもかけず、過去の遺物がほとんど無傷で見つかった。はるか昔に袂を分かったはずのインド・ヨーロッパ祖語と古代中国語があまりによく似ていることが判明したのである。これまで言語学者たちは、一つの言語が二つに分岐して 5 千年も経てば、両言語の系統的なつながりはほとんど分からなくなる、と考えてきたふしがある。しかし少なくともインド・ヨーロッパ祖語と古代中国語に関しては、それがあてはまらない。両言語の類似性は、5 万年あるいは 6 万年という歳月がまるで凍りついていたかのように、かたくなに保持されてきた。この持続的で頑とした、神

秘的にさえ思われる類似性は、大袈裟に言うところ、インド・ヨーロッパ祖語と古代中国語の話者が5～6万年も前の言語をほとんどそのまま話していたことを意味する。そしてこのことは取りも直さず、言語の起点が出アフリカ以前のアフリカにあったことを物語っている。実際、そうとしか思えない。

(2) 古代中国語は先史語研究を進化させるのに役立つ

インド・ヨーロッパ語族の研究は、2百年以上にわたって、ほとんどもっぱらインド・ヨーロッパ語族の内部に目が向けられてきた。言語接触の問題を除けば、比較対象に据える言語が外部に存在するなどとは夢想だにされなかったからである。ここで少し立ち入って、インド・ヨーロッパ祖語の語根の姿を古代中国語のレンズを通して描き直してみよう。

この点に関して最初に指摘しておきたいのは、たとえばワトキンス (1985) があげている語根の中に厳密な意味での語根と言い難いものが数多く含まれているということである。たとえば、先に示した

- ㊦ *gers- 「まわす・まわる (turn) ・まげる・まがる (bend)」
 *gel- 「まるくなる・まるまる (form into a ball)」

という形態は同じ単語家族に属するが、これらの両方を語根とするのには問題がある。同じ単語家族に属する古代中国語の

- ㊦ 回 (fiuər) 「まわる・まわす」
 囿 (fiuər) 「かこむ・かこみ」

などと比較すれば、*gers- は根本的な「原子」に対する「分子」のようなもの、すなわち派生形と言うべき形態であることが知られよう。インド・ヨーロッパ祖語の原初的な語根は、古代中国語のほぼすべての語がそうであるように、CVC 型 (C=子音, V=母音) の連鎖を有していたと考えられる。そして、本来はそういうものとして再建されなければならぬ。

こうした見方はしたがって、たとえばワトキンスがあげている

- ㊦ *dhē- 「すえる (set) ・おく (put)」
 *aus- 「ひかる・かがやく (shine)」

という CV 型や VC 型の語根の指定にも修正をせまる。これを古代中国語の

- ㊦ 置 (tiəg) 「おく」
 晡 (p^huət) 「日がのぼる・日の出」

などの語と比較すれば、やはり CVC 型の *dhēg- や *paus- といった語根を想定するのが順当

ではなかろうか。本来の規格から少しはずれた形の語根、ひどい言い方をすると、「あたらずと言えども遠からず」といった再建形は枚挙に暇がない。

ところで、ガムクレリゼとイヴァーノフ（1984）はカフカースのカルトヴェリ語をインド・ヨーロッパ語と比較して、

- ㊦ *ur-el- 「くびき」 ↔ ㊦ *juk'-om 「くびき」
 ㊦ *e-sw- 「ブタ」 ↔ ㊦ *su- 「ブタ」
 ㊦ *diqa 「粘土」 ↔ ㊦ *dhegh-om 「つち・大地」
 ㊦ *dew-・*dw- 「おく」 ↔ ㊦ *dheH-[u]- 「おく」
 ㊦ *gen-・*gn- 「きく」 ↔ ㊦ *k'en・k'n- 「しる」

といった対応関係を示したうえで、これらのカルトヴェリ語はインド・ヨーロッパ語起源の借用語だとしている。そして彼らは、このような言語接触が遠い昔にあったという想定を梃子にして、インド・ヨーロッパ語族の故郷がカフカースを含む地域であると推定している。しかし、この立論はまさに砂上の楼閣である。なぜなら、彼らが借用語としているものと同源の語を古代中国語にも見いだすことができるからである。ちなみに、セム語の*mtk 「あまい」からの借用と彼らが見ているインド・ヨーロッパ祖語の*medhu- 「はちみつ」に関しても、本稿で示したように、古代中国語に miet 「蜜」という同源の語が存在する。

古代中国語は、これからの先史言語研究を目覚しく進化させる可能性を秘めている。それは歴史の深みを見通し、歴史記述の歪みを正す装置となりえる。このこともまた、本稿で得られた知見の一つである。

参考文献

- ウェイド Wade, Nicholas (2006) *Before the dawn: recovering the history of our ancestors*. Sterling Lord Literstic.
 (安田喜憲監修、沼尻由起子訳『5万年前—このとき人類の壮大な旅が始まった』イースト・プレス、2007)
- 大野 晋編 (2011) 『古典基礎語辞典』角川学芸出版。
 大野 晋ほか編 (1990) 『岩波古語辞典』(補訂版) 岩波書店。
 沖縄古語大辞典編集委員会編 (2011) 『沖縄古語大辞典』角川学芸出版。
 王 力 (1997) 『同源辞典』北京：商務印書館。
 海部陽介 (2005) 『人類がたどってきた道—“文化の多様性”の起源を探る』日本放送出版協会。
 風間喜代三 (1988) 「インド・ヨーロッパ語族」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典』第1巻：724-36、三省堂。
 片山龍峯 (2004) 『日本語とアイヌ語』(新装版) すずさわ書店。
 金久 正 (2011) 『復刻 奄美に生きる古代日本文化』南方新社。
 ガムクレリゼとイヴァーノフ (Гамкрелидзе, Т. В. & В. С. Иванов (1984) *Индоевропейский язык и индоевропейцы*,

1. ТОНЛИСИ. (J. Nichols, tr., *Indo-European and Indo-Europeans*, Part I. Berlin and New York: Mouton de Gruyter, 1995)
- 甲 東哲 (2011) 『分類 沖永良部島民族言語彙集』 南方新社.
- キャヴァリー - スフォルツァ Cavalli-Sforza, Luigi Luca (1996) *Geni, popol e lingue*. Adelphi Edizioni. (赤木昭夫訳『文化インフォマティックス—遺伝子・人種・言語—』産業図書株式会社, 2001)
- チャンダ Chanda, Nayan (2007) *Bound together: how traders, adventurers, and warriors shaped globalization*. (友田錫・滝上広水訳『グローバリゼーション—人類5万年のドラマ〈上・下〉』NTT出版, 2009)
- 寺澤芳雄編 (1997) 『英語語源辞典』 研究社.
- 藤堂明保・加納喜光編 (2005) 『学研漢和辞典』 学習研究社.
- 日本国語大辞典刊行会編 (1972-1976) 『日本国語大辞典』 (全 20 巻) 小学館.
- 中村幸彦ほか編 (1982-2003) 『角川古語辞典』 (全 5 巻) 角川書店.
- 山中襄太 (1979) 『続・地名語源辞典』 校倉書房.
- ワトキンズ Watkins, Calvert (1985) *Indo-European roots in American heritage dictionary of the English language*. Boston: Houghton Mifflin.

(2013 年 9 月 18 日 受理)